

留学報告書
～未知への飛行～

ボーリンググリーン州立大学
外国語学部（長期）

私は2024年の9月から2025年の5月までアメリカのオハイオ州にあるボーリンググリーン州立大学に留学をしていました。

留学を決意した理由は、アメリカへの憧れや、特別に学びたいことがあったからではありません。周りの友人に触発され興味を持ったから、ただそれだけの理由でした。これといった情熱も目標もないアメリカへの留学でしたが、得るものは数えきれないほどありました。本報告書では私が得たもの、学んだことを共有しようと思います。

まずは、授業についてから始めようと思います。アメリカに旅立つまえはアメリカでの授業は苦難の連続だろうと予想していました。しかし、存外そんなことはなく、授業の理解に関してはあまり問題ありませんでした。問題があったのはプレゼンテーションやディスカッション等のパブリックスピーキングにおいてでした。アメリカの授業では日本でよくありがちな教授の話を聞くだけの授業が全くなく、教授が生徒を巻き込んで積極的に授業参加をうながすことが多いです。そのため、授業中に頻繁にプレゼンテーションやアクティビティーがあります。最初の1か月は苦勞が絶えませんでした。アクティビティーでディスカッションがあっても、探り探りでいつも後手に回るばかり、自分の意見は出さず肯定するばかり、そんな意見交換に拘泥することが多々あり、もどかしさを感じる日々でした。プレゼンテーションに関してもいくつものもどかしい経験がありました。学期始めのころは自分の英語の程度をみなに悟られぬよう難しい言葉を盛り込み、実力以上のプレゼンをしようとするのがよくありました。単純にプレゼンの記憶ができず、身の丈に合っていないそれは数々の失敗を私にもたらしめました。しかし、失敗は気づきも運んでくれました。自分の伝えたいポイントが重要で、そこに至るまでの道はシンプルであればあるほどいいということです。それに気づいてからは簡単な言葉で、よりリラックスしてプレゼンができるようになりました。プレゼンがよりうまくできるようになると自信が出てきて、自分の意見をいつもではないですが主張できるようになりました。

二つ目は、食事についてです。留学中の食事は私にとって一番の悩みでした。BGSUには4つのカフェテリアがありましたが、私の住んでいた寮に併設されていた、Sundialというカフェテリアがなかなかの曲者でした。そこにはピザとハンバーガー、パスタの店しかなく、そのどれもが比較的高カロリーでした。面倒くさがりな私にとって、近場にあるジャンクフードの店というのはそれだけで有害な存在でした。寒い日の昼頃に私が向かうのは決まってそのカフェテリアでした。夜に行くのもそこでした。一時、一日一食にし

ようとしたことがありましたが、元気が出ずネガティブになる日が続き、すぐに断念しました。食事に関して、私が得たものは少しばかりの筋肉と、同じくらいの脂肪といえるでしょう。

三つめは人間関係についてです。友達作りは人類の永遠の課題です。私の流暢でない英語で友人が作れるだろうか、大学が始まった直後の目下の課題はそれでした。孤立しないように安っぽい笑顔を張り付け、たまたま同じ方向に向かっていて中国人学生や他の留学生につたない英語で話しかけに行きました。彼らとは仲良くなることができ、見かけたら立ち話をするくらいの関係になりました。また、留学生オリエンテーションではウェールズ人留学生と仲良くなり、最初の一か月は頻繁に行動を共にしました。しかし問題は現地の学生と仲良くなることでした。授業のディスカッションなどで話すチャンスがあっても、いつも後手に回るばかりで、自分の意見は出さず肯定するだけという、そんななああの意見交換にこだわってしまっていました。雑談をして仲良くなるなどもってのほかでした。そんな折に大いにお世話になったのが BGSU ジャパニーズクラブの面々です。彼らの一部は夏に短期留学で NGU に来ていて、顔見知りだったため簡単に受け入れてくれました。彼らは私を気遣ってくれていたのか、授業終わりに頻繁にジムや運動、食事やお出かけに誘ってくれたり、家に招待してくれたりしました。休日にはわざわざ遠出してショッピングモールに連れて行ってくれたこともありました。彼らには感謝してもしきれません。私の留学は彼らなしでは語れません。

また、私の少し変わったルームメイトも私の留学を語る上で欠かせません。彼は、身長は 190 センチ、体重が 100 キロ超はあろうかという巨漢で、どこか皮肉屋な印象のあるいかにもアメリカ人らしい男性でした。彼は 10 月ごろに彼の地元、ヒューロンとサンダスキーにあるシダーポイントという巨大な遊園地に連れて行ってくれました。ヒューロンでは彼の高校のフットボールを一緒に観戦しました。彼は地元ではかなり活躍していたフットボールの選手だったようで、いろんな人に話しかけられていました。得体の知れない小柄なアジア人を連れた巨漢の白人のコンビはたいそう不釣り合いに人々の目に映ったことは疑うまでもありません。田舎のリアルなアメリカを見る機会を与えてくれ、良いはなし相手にもなってくれた彼には感謝しかありません。

人間関係の面では、私が留学中に巡り会うことができた素晴らしい友人たち以外にここで挙げるべき気づきが一つあります。それは、私は自分の居場所を作るためにいろんな人に話しかけに行けるものの、一度居場所が確立してしまうとそこから出られずいつも同じ人とばかり付き合ってしまうことです。人見知りかもわかりませんが、集まりなどで新しい人と会うときはそれが顕著に出てしまい、知り合いや友人をほとんど増やせませんでした。そんな特徴に異国の環境に飛び込んでようやく気づき、人間関係においては新しい一歩を踏み出す勇気が常に必要だと気づかされました。

最後に語学力についてです。渡航前、私の英語のスピーキングはお世辞にもよいとは言えぬレベルでした。その後9か月間のアメリカでの生活を経て、大きな成長が見られるはずでしたが、ほとんど変わっていないというのが今の私の率直な自己評価です。留学中に語学力の面で苦勞しなかった日は一日たりともなく、英語を話すことに快適さを覚えることは最後までありませんでした。しかし、英語での会話に苦手意識を感じることは少なくなりましたと思います。一方でリスニング力は大幅に向上したと思います。留学初期は友人との電話で相手がなにを言っているのかわからず何度か聞きなおすことが常でした。それもあって電話を避けるようにしていました。それから9か月もの月日が過ぎ、気づけば苦手と思うことはなくなっていました。語学力の面で見れば9か月は無駄だったのではないかと感じてしまいましたが、思うに、私が9か月をかけて得たのは自信、これに尽きるのではないかと思います。

この貴重な経験を経て得たものを今後どう生かしたいかについて述べ、本報告書のまとめとしたいと思います。留学での経験は未知の環境に飛び込むことへのハードルを大いに下げたと思います。留学から帰ってきて、私は今まで自分がやろうとしなかったバイトをはじめました。就職関連では、将来海外駐在員として働くことも可能性の一つとして考えるようになりました。あまり関わってこなかった人と関わるようになり、行動が変わったと思います。留学は単に語学力を伸ばすためのものではなく、慣れない環境での生活を通して、多大な影響をもたらし、人生をより豊かにしてくれる経験だと感じています。留学での大切な思い出を胸に、これからも未知を恐れず色々なことに挑戦していこうと思います。